

吹く楽器について考えてみよう

吹く楽器として、リコーダー（p.4-）、篠笛（^{しのぶえ}p.18-）、尺八（^{しゃくはち}p.24,25）を取り上げています。
ここでは、リコーダーで習ったタンギングに着目して、楽器の背景にある伝統や文化について考えてみます。



リコーダー



アーティキュレーションについても
振り返ってみよう（▶ p.16）。

タンギングと響きの関係

右の写真はドイツのハンブルクという都市にある教会です。古くからリコーダーが演奏されてきたヨーロッパの伝統的な建築は、この教会のように、石造りで音がよく響きます。これを「残響が多い」といいます。

残響が多い場所で音の出だしを明確にするには、どのような演奏の仕方をするといのでしょうか？ その答えの一つが「タンギング」なのです。



タンギングと言葉の関係

リコーダーはフレーズの最初や音をくぎるときなど、基本的にタンギングを用います。下の図はタンギングをするときの発音の仕方を表しています。（p.6を振り返ってみよう）

	低音域	中音域	高音域
かたい ↑	ト to	トゥ tu	ティ ti
	ド do	ドゥ du	ディ di
やわらかい ↓	ロ ro	ルー ru	リー ri

表現の目的によって、低音域の発音を中音域に用いることもあります。

“tu”や“du”で大事なものは、最初の子音“t”と“d”をはっきりとさせ、音の出だしを明確にすることです。この「子音をはっきりとさせる」ということは、リコーダーが発展してきたイギリスやフランス、ドイツなど、ヨーロッパの言葉の特徴とよく似ています。

篠笛と尺八は日本の楽器です。演奏するときには、基本的にタンギングは用いません。フレーズの最初は息だけで始め、同じ音が続くときは指を打ち直して音をくぎります。（篠笛は p.20，尺八は p.25 を見てみよう）



篠笛



尺八

考えてみよう 1 タンギングと言葉の関係

日本語はヨーロッパの言葉に比べると、“t”や“d”のような子音をはっきりと発音しなくても、ある程度、言葉の意味を理解することができるといわれています。
このことと「篠笛や尺八はタンギングを用いないで演奏する」ということの関係性について考えてみよう。

考えてみよう 2 タンギングと響きの関係



写真の家屋は木造で、障子やふすまで仕切られた造りをもつ伝統的な日本建築です。
石造りの建築に比べると、
屋内の残響はどのような感じでしょうか？
伝統的な日本建築の中で演奏されてきた楽器と「タンギングを用いないで演奏する」ということの関係性について考えてみよう。